

オホホ

西表島の千立地区の節祭（しちまつり）に登場する人気者。

悪い神様とされていて、オホホホホ〜と奇声を発しながら札束を見せびらかし、観客たちに取り入ろうとしたり、ミルク様の子供を誘ったりするとか。

オホホ

オホホ

バートゥ

バートゥは、沖縄県宮古島で行われる悪霊払いの伝統行事。1993年に重要無形民俗文化財に指定された。

厄払いには誰彼かまわず人や新築家屋に泥を塗りつけて回るというもので、泥を塗ると悪霊を連れ去るとされている。

バートゥ

ミルク

ミルク行列や弥勒節を踊るときにかぶられる面。

『ミルク』は、『ミロク』が沖縄方言に変化したもので、『弥勒』のこと。東方の海上から神船に五穀の種を積んでやってきて豊穡をもたらす来訪神とされている。

バートゥ

アンガマ - ウシュマイ -

石垣地方で受け継がれる『アンガマ』は、あの世からの使者であるウシュマイ（お爺）とウミー（お婆）が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問し、珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する伝統行事。そのときかぶる木製の面が『アンガマ面』。

バートゥ

アンガマ - ウミー -

石垣地方で受け継がれる『アンガマ』は、あの世からの使者であるウシュマイ（お爺）とウミー（お婆）が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問し、珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する伝統行事。そのときかぶる木製の面が『アンガマ面』。

バートゥ

ダートゥーダー

小浜島の民俗芸能で、4人が黒い面を被って登場し、歌声に合わせていろいろな所作を見せる。歌詞も、その所作の意味も解明されていない。それを踊る者は貧しい者とされていたため、だんだんと嫌がられるようになり、この踊りは廃止された。ところが近年、その歌と踊りが見直されるようになった。

バートゥ

マユンガナシ

八重山諸島の石垣島川平（かびら）に伝わる節祭（せちえ）にはマユンガナシという神が登場する。「マユ」とは「豊かな真の世」のことである。「ガナシ」は敬称。で、あわせて「真世の皆様」という意味である。石垣島ではマユンガナシの登場を境にして「節」が改まるとされ、これを「初正月」と呼んでいる。

バートゥ

スネカ

囲炉裏やコタツに入っただけばかりで入る者の脛に付いた火の斑を剥ぎ取ってしまう、といった意味の「脛皮たくり」が「スネカ」の語源と言われている。岩手県大船渡市三陸町吉浜で、毎年1月15日に行われる恒例行事。2004年に重要無形民俗文化財に指定された

バートゥ

なまはげ

冬に囲炉裏にあたっていると手足に「ナモミ」「アマ」と呼ばれる低温火傷ができることがあり、“それを剥いで” 怠け者を懲らしめ、災いをはらい祝福を与えるという意味での「ナモミ剥ぎ」から「なまはげ」と呼ばれるようになった。「男鹿のナマハゲ」として、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

バートゥ

かまどがみ

竈神

火の神であると同様に農業や家畜、家族を守る守護神ともされる。竈は座敷などと比べて暗いイメージがあることから、霊界と現世との境界を構成する場所とし、かまど神を両界の媒介の役割を持つ両義的な神とする考え方もある。また、性格の激しい神ともいわれ、人に祟りをおよぼすとの伝承もある。

バートゥ

りょうおう

陵王

獅子舞のルーツとも言われている舞楽面陵王。

中国古代の英雄で、軍略家として有名な軍人蘭陵王はその容姿があまりに優美だったので、戦場で敵を驚かすために、わざと恐ろしげな面をかぶり、自ら作曲した『蘭陵王入陣曲』を演奏しながら出陣したといわれている。

※日本の神々シリーズですが、獅子舞のルーツということで採用しました。

バートゥ

新鳥蘇

雅楽、舞楽の曲名。この舞を踊る時に付けるお面。

柔和な表情の人面をつけ、この舞にだけ用いる特殊な胃（かぶと）をかぶり、太刀を腰に、笏を手にもって舞う。春日大社に収められている舞楽面 新鳥蘇は平安時代後期の作で国の重要文化財でもある。

※雅楽（かがく）は、中国、朝鮮半島を経て、日本で花開いた伝統的な音楽の一つ

バートゥ

筒姫

夏の女神。筒姫に関する謂われは不明な点が多い。陰陽五行説から、夏は南になりますが、平城京の南にある夏の象徴となる地理的な名所もよく分かっていない。

一説によると、平城京の南には古墳時代、筒形銅器と呼ばれる用途の不明である副葬品が造られ、古墳を飾ったことから筒姫という名になったという。

きつね

狐

狐は古来より日本人にとって神聖視されていた。

江戸時代に入って稲荷が商売の神と公認され、大衆の人気を集めるようになると、稲荷狐は稲荷神という誤解が一般に広がり、またこの頃から稲荷神社の数が急激に増え、流行神（はやりがみ）と呼ばれる時もあった。

バートゥ

たぬき

狸

日本の狸は古来から森羅万象を司るものとして神格化されていた。しかし仏教伝来後は、神の使いとされる狐や蛇などの動物以外は神格を失い、特別な能力を持つ獣というイメージだけが残された狸は、悪しき者または妖怪とみなされ、神秘的で恐ろしいイメージを持たれるようになった。

バートゥ

てんく

天狗

天狗は、日本の民間信仰において伝承される神や妖怪ともいわれる伝説上の生き物。一般的に山伏の服装で赤ら顔で鼻が高く、翼があり空中を飛翔するとされている。俗に人を魔道に導く魔物とされ、外法様ともいう。また後白河天皇の異名でもあった。

バートゥ

からすてんく

烏天狗

烏天狗は、大天狗と同じく山伏装束で、烏のような嘴をした顔、黒い羽毛に覆われた体を持ち、自在に飛翔することが可能だとされる伝説上の生物。小天狗、青天狗とも呼ばれる。仏法を守護する八部衆の一、迦楼羅天が変化したものともいわれている。

バートゥ

ほんにゃ

般若

「嫉妬や恨みの籠る女の顔」としての鬼女の能面。一説には、般若坊という僧侶が作ったところから名がついたといわれている。あるいは、『源氏物語』の葵の上が六条御息所の嫉妬心に悩まされ、その生怨霊にとりつかれた時、般若経を読んで御修法を行い怨霊を退治したから、ともいわれている。

バートゥ

こおもて

小面

小面の「小」は小さいという意味ではなく、可憐さ、雅やかさ、初々しさなどを意味する。女性の美しさを端的に表現した面である。

バートゥ

ひよっこ

ひよっこ

ひよっこの語源はかまどの火を竹筒で吹く「火男」がなまったという説や、口が徳利のようであることから「非徳利」からとの説もある。出雲の国はかつて製鉄が盛んであり、その砂鉄採取が所作の源流とされ、炎と関係の深い金属精錬神への奉納踊りの側面もあった。

バートゥ

おおかみ

狼（大神）

日本では関東・中部地方において秩父の三峯神社や奥多摩の武蔵御嶽神社でオオカミを眷属として祀っており、山間部を中心とした狼信仰が存在する。オオカミを「大神」と当て字で表記していた地域も多く、アイヌではエソオオカミを「大きな口の神」「狩りをする神」「ウォーと吠える神」などと呼んでいた。

バートゥ

おおなまず

大鯨

地下に棲み、身体を揺するり地震を引き起こすとされる。琵琶湖にある竹生島神社には鯨が龍に変身して島と神社を守るとい言い伝えがある。群馬県前橋市の清水川にはオトボウナマズという主が、釣り人を追いかけるといふ説話がある。熊本県阿蘇市の阿蘇神社の氏子は鯨を神の使いとして信仰し、捕獲・食用はタブーとされている。

バートゥ

みしゃぐじさま

ミシャグジ様

日本古来の神。疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が聚落に入るのを防ぐとされる神である。縄文時代の遺跡からミシャグジ神の御神体となっている物や依代とされている物と同じ物が出土している事などから、この信仰が縄文時代から存在していたと考えられている。

バートゥ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ヨッカブイ

大ガラッパ

ENGIMONO

日本の神々シリーズ

あめのみなかぬし

天之御中主神

天之御中主神は天地開闢（かいびやく）神話で宇宙に一番最初に出現し、高天原の主宰神となった神。その名が示すとおり宇宙の真ん中において支配する神で、日本神話の神々の筆頭に位置づけられている。その姿はほとんど神祕のベールに包まれている。

たかみむすび

高御産巢日神

造化三神。日本神話に登場する「支配・統治」の神。高木神（たかぎのかみ）という別名がある。別名の通り、本来は高木が神格化されたものを指したと考えられている。女神的要素を持つ神皇産霊神と対になり、男女の「むすび」を象徴する神であるとも考えられる。

かみむすび

神産巢日神

造化三神。日本神話に登場する「生命・生産」の神。高御産巢日神と対になって男女の「むすび」を象徴する神でもあったと考えられる。本来は性のない独神であるが、造化三神の中でこの神だけが女神でもとされる。

うましあしかびひこぢ

宇摩志阿斯訶備比古迩神

日本神話に登場する「徴（かび）」の神。神名の「ウマシ」は良いものを意味する美称である。「アシ」は葦「カビ」は徴と同源で、醱酵するもの、芽吹くものを意味する。「葦の芽」に象徴される万物の生命力を神格化した神である。一般的に活力を司る神とされる。

あめのとこたち

天之常立神

別天神五柱の最後に現れた神である。独神であり、現れてすぐに身を隠した。天（高天原）そのものを神格化した、天の恒常性を表した神である。

いざなぎ

伊邪那岐命

伊邪那岐は、日本神話に登場する男神。天地開闢（かいびやく）において神世七代の最後に伊邪那美とともに生まれた。伊邪那美命の兄であり夫。天照大神、月読命、須佐之男命などの神を生み出した。色々と説はあるが、「いざな」は誘う、「ぎ」は男を表す。

いざなみ

伊邪那美命

伊邪那美命は、日本神話の女神。伊邪那岐命の妹であり妻。別名 黄泉津大神、道敷大神、天地開闢（かいびやく）において神世七代の最後に伊邪那岐命とともに生まれた。色々と説はあるが、「いざな」は誘う、「み」は女を表す。

あまてらす

天照大神

天照大神は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の左目から生まれたとされている。皇室の祖神で、日本民族の総氏神とされ、太陽を神格化した神であり、皇室の祖神の一柱とされる。信仰の対象、土地の祭神とされる場所は伊勢神宮が特に有名。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。

すさのお

須佐之男命

須佐之男命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の鼻から生まれたとされている。海原を神格化した神であると考えられている。八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した暴れん坊の神様。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。

つくよみ

月読命

月読命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の右目から生まれたとされている。月を神格化した、夜を統べる神であると考えられている。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ぶ。

ひのかくつち

火之迦具土神

神産みにおいてイザナギとイザナミとの間に生まれた神である。火の神であったために、出産時にイザナミの陰部に火傷ができ、これがもとでイザナミは死んでしまう。その後、怒ったイザナギに十拳剣「天之尾羽張（アメノオノハリ）」で殺された。

あめのうずめ

天鈿女命

天鈿女命は、日本神話に登場する女神。岩戸隠れで天照大神が天岩戸に隠れて世界が暗闇になった「岩戸隠れ」に登場する女神。芸能の神様とされている。日本最古の踊り子とも言われている。

たしからお

手力男命

手力男命は、日本神話に登場する神。力の神、スポーツの神として信仰されている。怪力を持つというイメージのある手力男命は、昔から人々に人気があり、各地に手力男命が登場する神楽が伝わった。

ひるこ / えびす

蛭子命

イザナギとイザナミとの間に生まれた最初の神。子作りの際にイザナミから先にイザナギに声をかけた事が原因で不具の子に生まれたため島から流されてしまう。蛭子神が流れ着いたという伝説は日本各地に残っている。蛭子と書いて「エビス」と読むこともあることから、ヒルコとエビスを同一視する説が室町時代からおこった。

しなつひこ

志那都比古神

神産みにおいてイザナギとイザナミの間に産まれた神。風の神であるとしている。神名の「シナ」は「息が長い」という意味である。古代人は、風は神の息から起きると考えていた。風は稲作に欠かせないものであるが、台風などの暴風は人に大きな被害をもたらす。そのため、各地で暴風を鎮めるために風の神が祀られるようになった。

くくのち

久久能智神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。木の神であるとしている。神名の「クク」は、茎と同根で木が真っ直に立ち伸びる様を形容する言葉とも、木木（キキ・キキ）が軽じてクク・ククになったものともいう。「ククノチ」は「茎の神」「木の神」という意味。

おおまつみ

大山津見神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。山の神であるとしている。「オオヤマツミ」は「大いなる山の神」という意味。別名は和多志大神。「わた」は海のお古語で、海の神を表す。すなわち、山、海の両方を司る神ということになる。鹿屋野比売神との間に四対八柱の神を産んでいる。

かやひめ

鹿屋野比売神

神産みにおいてイザナギ・イザナミの間に産まれた神。野の神であるとしている。「カヤ」は葦のことである。葦は屋根を葺くのに使われるなど、人間にとって身近な草であり、家の屋根の葺く草の霊として草の神の名前となった。別名の「野槌」は「野の精霊」の意味である。山の神である大山津見神との間に四対八柱の神を生んでいる。

にぎ

邇邇芸命

天照大神の孫。木花之開耶姫を妻とし、火照命（海幸彦）・火閻降命（火須勢理命）、彦火火出見尊（山幸彦）が生まれた。農業の神として信仰されており、霧島神宮（鹿児島県）、高千穂神社（宮崎県）、築土神社（東京都）、射水神社（富山県）、子安神社（三重県）、常陸國總社宮（茨城県）などに祀られている。

このはなさくやひめ

木花咲耶姫

邇邇芸命と木花咲耶姫との間の子。火の中ですんだ三人の子の末で、火が消えかけた時に生まれたのでホオリ（「ホ」は“火”を意味し「オリ」は“遠い”をいみする）と名付けたとする。兄にホデリ（海幸彦）、ホスセリがいる。神武天皇の祖父に当たる人物。

いわながひめ（このはなちるひめ）

石長姫（木花知流比売）

木花開耶姫の姉。岩の永遠性を表すものであり、長寿の象徴。ニニギの元に嫁ぐが、石長姫の容姿は醜かったことから父の元に戻り返された。妊娠した木花開耶姫を嫉妬した石長姫が呪い、それが人の短命の起源であるとしている。

ほおり

火遠理命（山幸彦）

邇邇芸命と木花咲耶姫との間の子。火の中で生んだ三人の子の末で、火が消えかけた時に生まれたのでホオリ（「ホ」は“火”を意味し「オリ」は“遠い”をいみする）と名付けたとする。兄にホデリ（海幸彦）、ホスセリがいる。神武天皇の祖父に当たる人物。

ほでり

火照命（海幸彦）

邇邇芸命と木花咲耶姫との間の子。火がさかんに燃えて照り輝いている時に生まれたのでホデリ（「ホ」は“火”を意味し「デリ」は“照り”をいみする）と名付けたとする。弟にホスセリ、ホオリ（山幸彦）がいる。

とよたまひめ

豊玉姫

火遠理命の妻。海神の娘。浦島太郎の「乙姫様」のモデルという説がある。豊玉姫命という神名は、姿かたちの見目麗しい女性を意味する。聖母神であると同時に、福を招き、出世を約束する女神である。本当の姿は和邇（サメ）である。

あかめ

赤目

山幸彦と海幸彦に登場する赤目。海幸彦の釣り針を飲んでしまい、のどに引っかかって取れなくなってしまふ。このことが原因で山幸彦と海幸彦が対立してしまう。

さるたひこ

猿丹彦命

「鼻長七咫・背長七尺」という記述から、天狗の原形とする説がある。「天地を照らす神」ということから、天照大神以前に伊勢で信仰されていた太陽神だったとする説もある。その異形な風貌から赤鼻の天狗とされるが、仏教、特に密教系の烏天狗と混同されやすい。

とりのいわくすふぬ

鳥之石楠船神

日本神話に登場する神であり、また、神が乗る船の名前である。別名を天鳥船神（アマトリフネ）という。神名の「鳥」は、船が進む様子を鳥が飛び様に例えたとも、水鳥が水に浮かんで進む様に例えたともされる。「石」は船が堅固であること、「楠」は、船は腐食しにくい楠の材で作られていたことによるかとの説が一般的である。

おおくにぬし

大国主

須佐之男命の息子。大国主は色々な女神との間に多くの子供をもうけている。子供の数には『日本書紀』には181柱と書かれている。記においては以下の6柱の妻神がいる。妻子の多さは、明らかに大国主命が古代において広い地域で信仰されていた事を意味する。

おおものぬし

大物主

大物主は蛇神であり、稲作豊穰、疫病除け、醸造を司る神である。また国の守護神である一方で、崇りなす強力な神ともされている。大物主は、出雲の国造りの大国主大神と同一の神だという説がある。または大国主の幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）であるとも言われている。

きまた

木俣神

大国主命と八上比売との間に産まれた神。大国主命の正妻である須勢理毘売命がすごい嫉妬深く、恐ろしい女神だったので、八上比売は生まれたばかりの木俣神を「木の股」に挟んで置いて実家に帰ってしまう。子供を木の股に挟む意味は、子供の健康を願う儀式とされている。

すせりひめ

須勢理毘売命

スサノオの娘。大国主の正妻。神名の「スセリ」は「進む」の「スス」、「すさぶ」の「スサ」と同根で、積極的な意思をもつ女神の意である。この女神の持つ激情は、スサノオの試練を受ける夫の危機を救うことに対して大いに発揮される。激しい嫉妬をのぞかせ、気が強そうですが、可愛さや、けなげでもあり、元祖ツンデレとも呼ばれている。

あめのかく

天迦久神

大国主のもとに派遣される使者として、天尾羽張神（あめのおはぶりのかみ）がつかわれることを同神につたえにいった神。天尾羽張神は、自分の代わりに子の建御雷神（たけみかざちのかみ）をさしだした。迦久は鹿児(かこ)の意で鹿の神といわれる。

しゅてんどうし

酒吞童子

酒吞童子は、丹波国の大江山、または京都と丹波国の国境の大枝に住んでいたとされる鬼の頭領。酒が好きだったことから、部下たちからこの名で呼ばれた。他の呼び名として、酒顔童子、酒天童子、朱点童子と書くこともある。彼が本拠とした大江山は龍宮のような御殿に樓み、数多くの鬼達を部下にしていた。

いばらきどうじ

茨木童子

酒吞童子とともに京都を荒らした大鬼。実は茨木童子は“男の鬼ではなく、女の鬼だった”という説があり、または酒吞童子の息子、はては彼の恋人だったという説も伝わっている。

おもいかね

思金神

名前の「おもひ」は「思慮」、「かね」は「兼ね備える」の意味で、「数多の人々の持つ思慮を一柱で兼ね備える神」の意である。思想や思考、知恵を神格化したものと考えられている。「八意」は多くの知恵という意味であり、立場を変えて思い考えることを意味する。高天原の知恵袋といっても良い存在である。

いそたける

五十猛神

須佐之男命の息子。林業の神として信仰されている。また、土の船を作り海を渡ったことから、造船、航海安全、大漁の神として信仰され、商売繁盛、開運招福、悪疫退散、厄除け等の神徳もある。

すくなびこな

少名毘古那

国造りの協力神、常世の神、医薬・温泉・禁厭（まじない）・穀物・知識・酒造・石の神など多様な性質を持つ。酒造に関しては、酒は古来薬の1つとされ、この神が酒造りの技術も広めた事と、神功皇后が角鹿（敦賀）より還った成神天皇を迎えた時の歌にも、「少名御神」の名で登場する為、酒造の神であるといえる。

みづはのめ

弥都波能売神

神名の「ミツハ」は「水走」と解して灌漑のための引き水のことを指したものとも、「水つ早」と解して水の始始め（泉、井戸など）のことともされる。龍や小児などの姿をした水の精であると説明されている。

あまつまら

天津麻羅

日本神話に登場する鍛冶の神である。「神」「命」などの神号はつけられていない。アマツマラという神名のうち、「アマツ」は天津津を示すものであるが、「マラ」は「めうら」すなわち片目の意で、鍛冶が鉄の色でその温度をみるのに片目をつぶっていたことからとする説がある。『日本書紀』に登場する天目一箇神と同一神であるとも考えられる。

くしなだひめ

櫛名田比売

ヤマタノオロチ退治の説話で登場。ヤマタノオロチの生贖にされそうになっていたところを、スサノオにより姿を変えられて湯津爪櫛となる。スサノオはこの櫛を頭に挿してヤマタノオロチを退治する。神名の「クシ」は『靈妙・素晴らしい』、続く「ナダ」は稲田を表す言葉であり、クシナダヒメとは豊かな稲田を象徴する女神とも言われる。

うさぎ

兎神（因幡の白兎）

因幡の白兎（いなばのしろうさぎ）とは、日本神話に出てくる兎、または、この兎の出てくる物語の名。『古事記』では「稻羽之素菟」と表記。因幡の白兎はワニに襲われた哀れな小動物ではなく、兎神という神様。白兎、大兎といった名前で神社に祭られている。

ひとことぬし

一言主

吉凶を一言で言い放つ託宣の神である。葛城神、葛城一言主神等の異名を持ち、「いちごんさん」と呼ばれ、一言であればどんな願いでも叶える神として古来から信仰されていた。その参拝は願いを一言だけ口にすることが許されていることから“無言参り”とも呼ばれた。

いなせはぎ

稲背脛命

鳥根県伊奈西波岐神社の御祭神。出雲国造の祖神、天穂日命の御子。国譲りの神勅を大国主大神に伝えた時、稲背脛命が使いに出され、事代主命を呼び直し国譲りについての諾否を問い、国譲りが武力によらずして平和裡に解決された事は、稲背脛命等の奔走の賜であり、その功績は大きいといえる。

さほひめ

佐保姫

春の女神。白く柔らかな春霞の衣をまとう若々しい女性と考えられ。この名は春の季語であり菓子の名前にも用いられている。

たつたひめ

菟田姫

秋の女神。鮮やかな緋色や黄金の秋の草木の錦を纏った妙齡の女性として想像される。菟が裁つに音が似ているため裁縫の神としても信仰される。

しにがみ

死神（伊邪那美命）

人間を死に誘う、または人間に死ぬ気を起こさせるとされる神。日本神話において伊邪那美命が人間に死を与えたとされており、伊邪那美命を死神と見なすこともある。

どうまじん

道祖神

路傍の神。集落の境や村の中心、村内と村外の境界や道の辻、三叉路などに主に石碑や石像の形態で祀られる神。松尾芭蕉の「奥の細道」では旅に誘う神様として冒頭に登場する。村の守り神、子孫繁栄、近世では旅や交通安全の神として信仰されている。古い時代のものは男女一対を象徴するものになっている。

やつのかみ

夜刀神

蛇てで頭に角を生やした神で、その姿を見た者は一族もろとも滅んでしまうと伝えられていた。夜刀神の「夜刀（やつ・やと）」「谷（やつ）」を意味し、文字通り谷や葦原などの人による開拓以前の野生状態の自然を可視化したもの、自然の持つ霊感を形象化したものである。

しじん・せいりゅう

四神 - 青龍 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。東方青龍。東方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。

しじん・びやくこ

四神 - 白虎 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。西方白虎。西方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。

しじん・すざく

四神 - 朱雀 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。南方朱雀。南方を守護する神獣とされる。※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。

しじん・げんぶ

四神 - 玄武 -

中国の伝説上の神獣、四神の1つ。北方玄武。北方を守護する神獣とされる。

※日本の神々シリーズですが、日本に馴染みがあるということで採用しました。

